

「望まれた命」

招詞：イザヤ書 11 章 1～10 節

聖書：マタイによる福音書 1 章 18～25 節

2018 年 12 月 16 日 礼拝説教 遠藤清賢

はじめに

クリスマスを迎える前の週となりました。クリスマスは新しい命の誕生を祝う日です。しかも、私達全人類の命を救うイエス・キリストの誕生の日です。人間としてこの世に命を与えられ、その命は主イエスキリストによって永遠の命として私たちの肉体に貸与されています。私たちはその命を継承する為に今を生きています。命はただ単に生きるということではなく、信仰を持ち、いかに生きるのかという課題と意志をもって、互いにそれぞれの命を愛し、支え合うことが求められる命です。そして、その精神と一体になった命を継承することを、神様は私たちに求められています。しかし、今の私たちは命を自分個人の所有物として捉え、命を自分の思いのまま時を過ごすことが自由な生き方だと思っています。神から与えられた命は、あるべき姿があり、それを、信仰を持って真実の命を追求することによって本来の命の働きが発揮されるということを神様は私たちに求めているのです。クリスマスを通して神様から貸与された命を、共に感謝の祈りを献げながら、この命について考えて見たいと思います。

1. 望まれた命の誕生

結婚をして子どもを授かることは、母親、父親そして家族にとって大きな喜びです。赤ちゃんの誕生はその家族に大きな幸せを運んできます。私たちは幼い赤ちゃんを見ると自然と笑顔になります。どの親にとっても、また家族にとっても大きな喜ばしい出来事なのだと思います。聖書においても命の誕生は神様の豊かな祝福の証しとして記述されています。全ての宗教は子どもの誕生を良き出来事として捉えていると思います。私達は水や空気を維持できる太陽と地球の距離、そして命を育むことの出来る奇跡的な環境の中で進化し、今のような肉体を得、神様から命を貸与され、約 85 年の時を過ごしています。そして、いつの時代であっても子どもの誕生は大きな喜びであり、生きるための希望と

なっています。子どもを育てることは私たちの精神文化に大きな影響を与えてきました。そして人間の幸せを子どもの未来を想像しながら、人間は如何に生きるべきなのかをそれぞれの時代の中で考え、問うてきたと思うのです。そして、子どもの命を育むために経済的な豊かさを求めてきました。いくら親に豊かな愛情があったとしても、生活するために必要な食べ物や住居、経済的な余裕が無ければ、子どもの命を守ることが出来ず、子育ては破綻してしまうのです。どの時代であっても生と死は表裏一体で人々の心に喜びや悲しみを刻み込み、幸せに生きるためにどうあるべきなのかを育んできたと思います。この今の社会は新しい命の誕生を授かり、その命を支え成長を育むための環境が整っているのかどうかと考えると、その環境は非常に危うい状態にあるのではないかと思ってしまう。それは虐待の報道や頻繁に起こる殺人事件等の報道は現在の家族には子どもの命を育む能力が失われていると言わざるを得ないのである。命を育む環境が失われているから少子化社会になってしまったのです。それは、父も母も働かなければ生活できない社会であるし、子どもを預かることは喜びよりもいかに子育てをしたらよいのかという不安の方が大きくなる精神環境になっています。10の家族があれば、その内1家族は子どもを育てることに於いて何かの問題を抱えている状況になっているのが私たちの社会です。その家族にとっては、せっかく授かった命は、望まれない命なのかもしれません。

2. 望まれない命の誕生(NHKクローズアップ現代より)

NHKクローズアップ現代で「赤ちゃんポスト」をとりあげて放送されたことが有ります。これは親が育てられない子どもを匿名で他者に預けることができる場所です。別名「こうのとりのゆりかご」とも名づけられています。赤ちゃんを授かっても自分で育てることが出来ない人が、その場所に子どもを預けることができるのです。ここは、2007年5月10日から運用が開始されました。熊本市の慈恵病院施設東側にあり、そこに60cm×50cmの扉が設置されています。その扉を開くと保育器が配置されていて、常に36度の温度が保たれています。新生児がこの保育器の中に入った時点でアラームが鳴り、医療関係者がすぐに駆けつける仕組みになっています。そして、防犯上扉を閉めると自動ロックがかかり、開けられない状態になります。ここには、監視カメラが設置されていますが、保護者のプライバシーを守るために子どもしか映らないようになっているのだそうです。預けることができるのは、原則、生まれて2週間以

内の子供に限られています。預けられた子供はすぐに慈恵病院の医師が健康状態を確認します。子どもの戸籍は熊本市長が作成し、名前が無い場合は熊本市長が命名します。ここは親の理由のいかんにかかわらず、子どもを預かり、誰にも知られることなくいつでも匿名で赤ちゃんの命を誰かに託すことが出来る場所なのです。ポストに預けられた子どもたちは医師たちによって健康状態を診断され、必要な場合は医療的な処置が施されます。その後、児童相談所等との連携によって児童養護施設や里親を斡旋され、その子が成長できる環境が整えられるのです。利用者数は、10年で130人の子どもがポストに預けられました。130人のうち、実の親が判明したのが2017年5月現在で103人です。利用された親たちは北海道から九州まで全国に広がっていたそうです。実の親がわからないケースは27人いるそうですが、慈恵病院の蓮田太二理事長は、匿名性は必要だといっています。それは「知られるくらいなら死ぬという人が現実にいるのです。」それだけ預ける親たちは切羽詰った状態になっている方が多いのだそうです。親がポストに託した理由は「生活困窮」「未婚」「世間体・戸籍」「パートナーの問題」「不倫」だそうです。社会的地位の高い人、収入に余裕のある人も複数いたとのこと。中には「留学したいから」と言う利用もあったそうです。匿名性が子どもの放棄を助長したようなケースも確かにあるのです。10年間で130人の子どもたちの29%が乳児院などの施設にいます。半数近い48%が養子・里親の元で生活しています。実の親の引き取りも18%あったそうですが、時に想定外のこともあり、ある里親が子どもを預かって2年経ったある日、児童相談所から「生みの親が返して欲しいと名乗り出た」と知らされ、里親は非常にショックだったといっています。子どもは3歳になり普通の親子になっていたからです。何より子供の心の傷が心配だったそうです。里親はあくまで預かるのが原則で親権は実の親にあるのです。親権を移すには、特別養子縁組の手続きが必要で児童相談所は養子縁組を進め、実の親との話し合いに1年かかり現在は里親の下で生活できるようになっています。どちらが子供にとって幸せか。この判断は難しいのです。慈恵病院はポストと並行して無料の電話相談に応じています。10年前に501件だった相談件数は、2016年は6565件にもなっているそうです。相談の結果、病院で安全に出産して、養子縁組につながったケースもあるそうです。

ここに預けられた最初の命は0歳の赤ちゃんではなく、3歳の男の子だったそうです。今は13歳になり里親の下で幸せに生活しています。里親は全てのこと

をその子に話してくれたそうです。そして、この子はこの赤ちゃんポストに預けてくれたことで、自分に家族を与えてくれたことを実の親に心から感謝しているのだそうです。自分が預けられた様子を覚えていて、実の父親が「かくれんぼしよう。」「ここで待ってね」といった言葉を鮮明に覚えていて、父親は必ず迎えに来てくれると毎日思っていたそうです。今は里親の下で、実の親がどんなに苦しい思いをして、このポストに自分を連れて来たのか想像できるようになったと話しています。

ここに來た命は捨てられた命ではありません。実の親にとっては望んだ命でなかったかもしれませんが、実の親が生きて欲しいという思いがあるからこそこのポストに自分の子どもの命を委ねたのだと思います。この命は預けられた命なのだとこの病院の理事長は言っています。日本では実の親の権利が優先されていて、子どもの思いや子どもの将来的な育ちが後になってしまうことが有るようです。法律によって子どもにとっても、里親にとっても悲しい結果になることもあるのだそうです。施設や里親の下で生活していた子が、実の親に引き取られ、その母親と一緒に心中し、命を無くした事例もあるのです。

この「赤ちゃんポスト」はドイツでの取り組みが手本になっているそうです。ドイツでは 200 カ所あり、預けられた命がしっかりと成長できるように制度がしっかりと整えられています。赤ちゃんポストのような場所があることは、単純にその存在が良いとは言えませんが、このような場所があることは今の社会では大切であり救いを感じることがができます。親が自らを隠して、ひっそりと子どもを産まざるを得ない社会であることの方が大きな問題なのです。そうせざるを得ない母親たち、父親たちが現実に多くいるのです。赤ちゃんポストはこのような親にとっての最終的なセーフティーネットとして貴重な働きを行っています。たとえ親がどのような状態であっても生まれた命が社会の中で豊かに祝福され健やかに生きることが出来る社会になること望まれます。しかし、私たちの社会は肉親の虐待によって命を失う子どもたちがいることは耐えがたい事です。主イエスは、子どもたちは神の国を創造し、その国の住民となるべき命であると私たちに語っています。その大切な命を親が自らの手で虐待し、葬ってしまう今の社会は、得体の知れない病に蝕まれているのだと思います。この世に誕生した新しい命は本来大きな喜びであるはずで、豊かな祝福に満たされる命なのです。しかし、この誕生を喜べない人たちが実際にたくさん居るのが、私たちの社会なのです。子どもの命を守りその成長を支えることは、

大きな喜びであり、この喜びは私達に与えられている神様からの豊かな祝福であり恵みなのです。しかし、この祝福と恵みを受け取ることが拒んでしまう私たちの社会に対して怒りや疑問、悲しみを感じてしまいます。私たちはこれではいけないのです。

3. キリストの誕生

クリスマスを迎えるにあたり、この主イエス・キリストの幼い命は、ある人には待ち望んだ命であり、ある人には望んでいない命でした。私たちは主の命をどのような思いで迎えるのでしょうか。羊飼いのような心で、3人の博士のような気持ちで、マリアの夫ヨセフのような思いで、または、ヘロデのような不安な思いで迎える人もいるかもしれません。ヘロデにとっては、主イエスの誕生は自分の地位や命に関わる危険な命の誕生だったのです。クリスマスはヘロデにとって不安な出来事だったのです。そのため、神様はイエス様が誕生された時にヨセフにしばらくエジプトに逃れて暮らすように声を掛けました。そして、ヘロデはイエス様が誕生したその年に生まれた男の子を全員殺害したという話は史実として記録に残されています。羊飼いは天使たちが現れ主の誕生を知ることが出来ました。そして、子どものような純真で素直な気持ちで主の誕生を喜びました。3人の博士たちは大きな星に導かれ、待ちわびた救い主が生まれたことを知り心から感謝しクリスマスを迎えています。ヨハネは自分の妻が神によって身ごもっていることを揺るぎない神様への強い信頼と信仰を持って受け入れクリスマスを迎えています。それぞれ、クリスマスの思いは違っていたとしても。私達クリスチャンにとって主の誕生は大きな喜びであり、生きる希望となる出来事であることに変わりはありません。この日を心から感謝し、祝うことが出来ることはこの上ない大きな喜びです。そして、私たちはこのクリスマスの時に自分の命が支えられ豊かな祝福の下にあることを実感することが出来るのです。自分の命が、主を信じ、信仰によって保たれていることを、誇らしく新しい世代の子どもたちに伝えることが、私たちが生かされている一つの大切な役割です。私たちの社会は病んでいますが、私たちが信仰をもって毎日を喜んで生きている姿は、この世では砂粒のような小さなものかもしれませんが、しかし、力強い光として、誇らしくこの社会に示して行きたいと思えます。このクリスマスを今年もみなさんと一緒にこの教会で迎えることが出来ますことを心から喜び感謝いたします。